

Jam Message '80
ジャム・メッセージ

PEOPLE
ニューフェイス&ニューボイス
ニューキャラクター

中尾幸世

NHKのTVディレクター佐々木昭一郎が、つげ義春原作「紅い花」以来、4年ぶりの新作「四季・ユートピア」を完成させた。制作に1年半をかけ、撮影したフィルムは上映時間にして30時間近くになる。とはいえ、ドキュメンタリー的な撮影方式がとられているため、基本的なスタッフはディレクター、カメラマン、録音マンの3人だけ。出演者もす



佐々木昭一郎(右)の撮影現場

七色の音の記憶を旅する少女

べて素人である。

台本に定められたセリフをしやべるだけの俳優は、すでに死んだ人間だ。生きた人間のあるがままの姿を描くために、佐々木昭一郎のドラマ作りにおいては、台本は必要ない。その場でいくつかの短いセリフと設定を与えられただけの人物の表情や息づかいを、カメラとマイクが「記録」してゆくのである。

佐々木昭一郎が、過去10年間に撮ったTVドラマは4本。それ以前にはラジオドラマが数本。作品の数より賞の数のほうが多い。国内では芸術祭大賞その他、国外ではエミー賞、ゴールデンニフ賞、イタリア賞などを受賞。現在も彼の作品はあちこちの国で放送されており、特にヨーロッパでの評価は高い。ネオ・レアルيسモの祖であり、イタリア映画のみならず、フランスのヌーベルバーグをはじめ、世界の映画史に多大な影響を与えた故ロベル



撮影は1年半にわたり、彼女の髪は腰まで伸びた。終了後、髪を切った。

ト・ロッセリーニ監督(と言って分らないければイングリッド・バーグマンの夫)は、佐々木昭一郎のTVドラマを見て「全く新しい映像だ」と激賞した。佐々木昭一郎は、この前のイタリア賞(世界で最も伝統のある放送コンクール)には審査員として招かれているし、(パラエティ)の取材の後には、イギリスからBBC放送のインタビュアーが彼を訪ねてくる、といった具合なのである。

「私は、或るひとりの人間を群衆の中から選び出し、その人間の美生活に、簡潔なプロットを与え、ひとつの作品を創造する」という佐々木昭一郎が、「四季・ユートピア」のヒロインとして選んだのは、5年前の佐々木作品「夢の島少女」にも主演していた中尾幸世。「夢の島少女」にも主演していた中尾幸世。「彼女と話していると、まるで禅問答みたいなやりとりになる。不思議な人である。」

「ピアノと絵のほかに特技は？」

「うーん、犬とコミュニケーションすることです(笑)。言葉では言わないんです。あたりまえにいうとテレビパシー」



「どんな話をするの？」

「元気がなくなってアイサツしたり、うちの犬だと悩み事を相談したり」

「犬の悩みって？」

「もっぱら、自分の散歩のこととか、生活のことで頭がいっぱいなんですわ」

「3年前からヨガをやっている。ヨガを始めから、犬とのコミュニケーションがスムーズ」

ズになったようだ。住んでみたい所は北極。
「地球のいちばん北が、時間の中でいちばん高い所のような気がするんです。地球が感じる時間の中で、ヘンなこといつてみたいだけだ」
現在、多摩美大グラフィック・デザイン科3年生。佐々木ディレクターが、彼女に与え

田中晶子

シナリオ作家協会が主催している「新人映画コンクール」は、脚本家になるためのひとつの登龍門として、また権威ある厳しい判定を下す選考会として、映画界ではよく知られている。毎年数多くの脚本家をめざす志望者が挑戦するのだが、29回目をむかえた79年、6年ぶりという入選者が出、そして史上最年少の19歳の女性であるという事で話題を呼んだ。
田中晶子、和光大学1年生である。
高校3年生のときに書いた「人形嫌い」での受賞。17歳の女子高校生の多感な日常生活を描いたものだ。常連応募者中心の20本の中で、

たプロットは、次のようなものである。
へ太陽、リンゴ、ピアノ——光、色、音。その中で人は生きていく。リンゴは地球だ。太陽よ、もつとまじめにやれ！と少女は叫んだ。少女は、誰もいない教室で、兄とともにピアノを焼失させた。少女の祖父が、海から馬車で運んできたピアノ。人は、何かを失い

何を言いたかったかって言われるの一番困っちゃう 何かがその中にあるからいいんでしょくに、ね?!

若い感覚と的確な表現力が買われたものだ。
——シナリオを書いたのは初めて？
田中 高校のとき、友だちと8ミリ映画をやりはじめて、最初はメモみたいなものからスタートしていった。でも、8ミリだと15分とか20分くらいなものだから、まともなものは出来なくて、長編を書いたのは初めてです。
——応募した動機は？
田中 衝動的だったんです。締切がちやうど受験時期と重なって、それも関係あったかな……クラスのみんなは一生懸命受験勉強やっついて、わたしはあまり勉強しなかつたから、どうせ一流大学には行けっこない、と

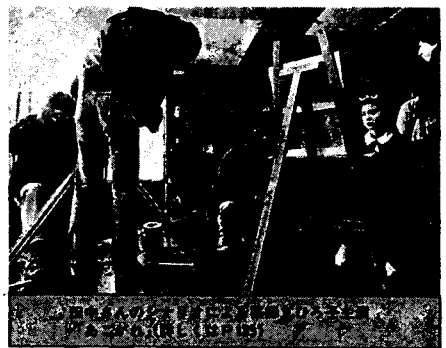
ながら生きていく。少女は、ピアノを失った。兄は、その日、風の中へ消えた。記憶は、消えずに残った。少女は、海辺でピアノ調律用の音叉を拾った。叩くと、A(ラ)の音が聞こえた。移り変わる四季。少女は、ピアノ調律師となり、故郷の学校へピアノを送る。少女の名は、志木栄子。四季の色。Aの音。七色

もプロになるのかな、なんて分からないし。
——映画は好きだったんですか。
田中 一番最初に見たのは「ローマの休日」です。名画座で。洋画は「卒業」とか「エデンの東」とかオーソドックスに見てまして(笑)、邦画はちよつとオーソドックスでないものが好きになりましたね。シナリオを書き出すきっかけみたいなものは、「旅の重さ」を見たときです。好きだ嫌いだというんじやなく、日本映画の面白さを感じたわけです。映画は邦・洋問わず見ます。

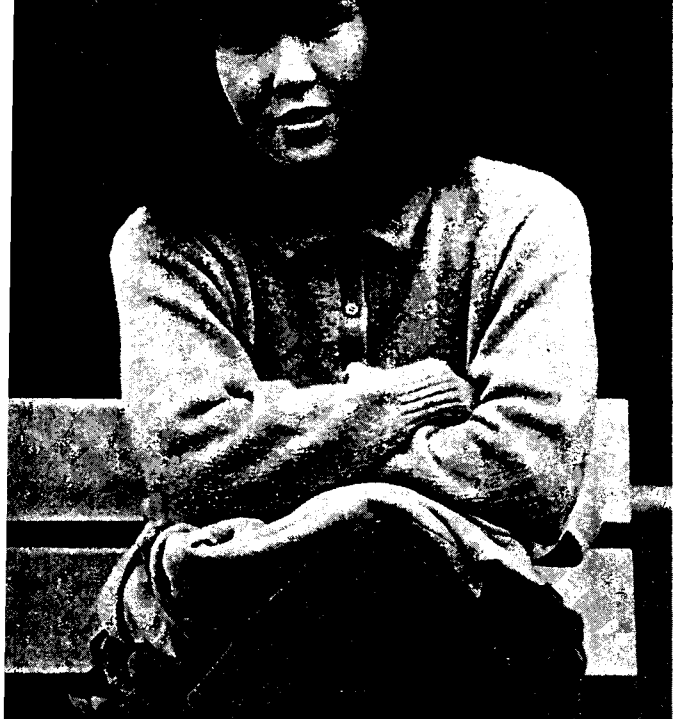
——好きなシナリオライターはいますか？
田中 いるんですけど、好きな人でも嫌いな作品ってのも書いてるでしょう。だから誰かって言えないですね。それに映画撮影用のシナリオは読んでいても全然面白くないですね。味もそつ気もなくて。ですから、「サード」なんか映画シナリオ用になってないほうが、読むなら面白い。シナンパーがきちんと打ちこまれていないシナリオ、読むシナリオっていうのですか、それなら楽しめるんですが、あらかじめ失われた恋人たちよ」とか「竜馬暗殺」などが印象に残ってます。特別にシナリオを書く勉強なんとしては困るだろうと思うけど(笑)。よく、シナリオの文体を考える奴は小説を書けば

の光、七色の音の中から、ピアノに託された少女の記憶、失われたものたち、失われた人の記憶が甦ってくる。
「四季・ユートピア」は、1月12日(土)夜8・00~9・30に放映される。フアンレターや番組の感想は、東京都渋谷区神南・NHK放送センター内ドラマ班までどうぞ。

いい」と言うでしょう。読ませられるシナリオと、プロのきちんとした撮影台本と、どっちがいいのか分かんないんです。中途半端だから、また自分なりにやっつけてやる気もするんです。
さかんに、「分かりません」が出てくる。あのラジオのインタビューでもその言葉を連発して、あなたってかなりのヘソまがりなんじやない?と言われたと笑う。しかし、自分が作品を書くときの姿勢と同じように、きちんと納得できる、話をしようとはつめていく。うかつには断定しない(味のあつさり)。人形嫌い」映画化の話もあるが、どうもうまく進んでないらしい。東陽一監督、兼師丸ひろ子主演の資生堂CF「あこがれ」(80年1月3日放映)が、自分のシナリオが映像化される最初のもの。



撮影現場にびったり同席。田中 映画の面白さって、シナリオを土台に、監督やカメラや、いろんな人のイメージが相乗されてゆく魅力があると思うのです。現場は体力と根気や武器にした大変な作業ですけど、楽しいですよ。演出やってみたくなつたんじゃないですか、と聞くと、現場にいるとね……でも、ひとりで書いてるほうが合つてるかもしれないし、と言いよどむ。最近の女性映画ブームの話題にも、そうそう簡単には乗ってこない。面白いものは面白い、それだけ。わたしはやりたいことをやっただけです。とポツリ。マイペースを崩さない、したたかなキヤラクターだ。



あつたかな。「シナリオ」という専門誌を購読して、募集してるのを知ってましたから出したのです。シナリオライターになろうとは思ってました。でも、こうしてチャンスがめぐってきたら、なりたいたいと思ってた気持ちばかりふくれて、その土台になってた意識がどこかへ隠れたみたいで……プロになろうとかなりたいとかの次元で考えてたわけじゃないんです。いまだ

あつたかな。「シナリオ」という専門誌を購読して、募集してるのを知ってましたから出したのです。シナリオライターになろうとは思ってました。でも、こうしてチャンスがめぐってきたら、なりたいたいと思ってた気持ちばかりふくれて、その土台になってた意識がどこかへ隠れたみたいで……プロになろうとかなりたいとかの次元で考えてたわけじゃないんです。いまだ

佐

々木昭一郎の名を、はつきりと記憶に刻みつけたのは、74年秋「夢の少女」を見てからだ。「夢の少女」という奇妙なタイトルにひかれて「夢の少女」の誤植ではないかとも思った。たまたま見たのだが、放送直後に佐々木昭一郎が「シナリオ」に発表したエッセイ（少年期の記憶を綴ったもので「夢の少女」にはふれていない）のタイトルが「夢の少女」となっていたのは、いまだにどうしたことなのか分からない。

分からないことはばかりである。「おはようぼくの海」(69年放送。後に「マザー」という本来のタイトルで再放送)から最新作「アンダルシアの虹」(83年3月19日放送)までの十数年間にわたって、幸運にも僕は佐々木昭一郎のテレビドラマ全作を見ているが、彼の名を意識して見たのは「夢の少女」の次の「紅い花」(76年放送)からである。これは、つげ義春の原作と比べながら見て期待外れだった、という人が多かった。しかしよく見ると、まぎれもなく佐々木昭一郎の「紅い花」である。プロログとエピログの、水面すれすれに滑走するカメラがワンカットで捉えた数分に及ぶ川下りのシーンだけでも、驚くべきものだ(このシーンのみ

くいあげるのである。と、文字にしてしまうと、いかにもキレイゴトめいてしまう。

この「方法」とは呼べない方法を、佐々木昭一郎は20年前に昔の世界IIラジオドラマで始めて、テレビドラマで完成させた。「マザー」は日本で(そしておそらく世界でも)初めて、ワイヤレスマイクによる同時録音を試みたテレビドラマとなった。そして「全く新しい映像だ」とロベルト・ロッセリーニを驚嘆させたこの「マザー」を、当時26歳から33歳という若さのスタッフが作りあげたことに僕も改めて驚かざるを得ない。織田晃之祐とともに「マザー」以来、佐々木昭一郎のテレビドラマを支えているのが名カメラマン葛城哲郎。彼らの仕事ぶりを具体的に知ることのできる証言を紹介したい。「夢の少女」のラスト、驚異的なヘリショットの撮影に参加したパイロットの言葉である。

「永いパイロット生活で、出演者を紹介されたのは、はじめてのことでした。『少年が少女を背負って夢の島を歩くの出来るだけ低空で撮りたい』と言うカメラマンの要求を聞いて、私は、その意図をいっぺんに理解することができました。私は、操縦桿に念力をこめて、地上50センチから30センチの低空に

フィルム撮影。他にちよつと似たような画面が思い浮かばないが、『2001年宇宙の旅』の「スター・ゲイト」のシーンをしのぐほどの、身も心も吸いこまれるような不思議な迫力と魅力にみちた画面——それを、隅田川を下るダルマ船の舳先から撮ったのだといっても、見ていない人には(あるいは見た人でも)ピンとこないかもしれない。そしてまた、このドラマには何よりもまず「音」が描かれていたのである。そう、音が、描かれていた。佐々木昭一郎のよき協力者、NHK効果部の効果マン織田晃之祐について書くだけでも、わが国における音響効果の歴史の原点までさかのぼらなければならぬ。デザイナー志望だった織田晃之祐は、音は時間の泡であり、音響効果は時間のデザインであるという。口笛の名手でもある彼は、人間の肌あいに音を近づけた、人間の感性に響かない音は雑音でしかないともいう。ここではこの彼の持論を紹介するにとどめる。ちなみに彼にとつての音響効果は単なるサウンド・エフェクトではない。自ら作曲も演奏もするが音楽監督ではない。彼はミュージック・エフェクトという造語で、その音作りを定義し、同

耐えました」

この時の少年が、「マザー」の横倉健児であることを、僕はドラマを見終わって思い出した。何年もの空白を超えて不意に浮かびあがってくる記憶。これは僕だけでなく、佐々木作品に接した多くの人が体験する不思議のひとつである。これも分からない。そしてこの時の少女が、その後「四季・ユートピアノ」(80年放送)「川の流ればバイオリンの音」(81年放送)「アンダルシアの虹」のヒロイン栄子を演じることになる中尾幸世である。栄子の栄はA(ラ)の音、普通の象徴でもあらう。文学で佐々木昭一郎に最も近いところに位置していると思われる小川国夫の言葉を引いて、大急ぎで結論の代りにしたい。「自分はこの瞬間の機微を書きたがっている文士だ」「私の立場からすれば、書くべきことがある、というよりも、或ることが書くべきことになる」「いわば出会いが問題になっていくのだ。言葉の本来の意味でハッピーニングなのだ。表現の失敗は、その時の感じを掴みそこなったということだ」「一回性」にもとづく方法でしか捉えられない「出会い」——栄子が旅をし、さまざまの人々と出会い、我々も彼らに出会う——を

題のLPレコードを発表している。効果マンの仕事がこういう形で世に出されたのは、わが国の数十年に及ぶ音響効果史上初めてのことである。興味のある方は「一聴を」。

『紅い花』を除く佐々木昭一郎(作・演出)のテレビ作品は、すべてオールロケと素人の出演者によるフィルムドラマである。現場スタッフは基本的に演出・録音・撮影(シンク

FORUM JOURNAL ● TV

『アンダルシアの虹』(佐々木昭一郎演) 出会いを一回性

藤田真男

ロ)の3人だけ。台本も必要ない。カチンコも使わない。素人の出演者に与えられるのは「役」ではなく「設定」である。その設定の中では、同じことは二度と起こり得ない。だから「NG」というものもない。出演者たちは、ドキュメンタリーとフィクションの接点で、演じているのではなく生きるものであり、スタッフはその一瞬における言葉や息づかいをす

描き続けてきた佐々木昭一郎にとつての「或ること」がたまたま「音」であり「川」であったということだろう。「瞬時の機微」を生きたまま掴むことを、勝新太郎は「偶然II完全」といい、佐々木昭一郎は「出会い」は偶然であり、必然である」といつている。とにかく見てもらうしかない。再放送もあるだろうし、連作『リバー・ス川』の第3作も、間もなくチェコでクランク・インする。

ロッセリーニを驚嘆させた彼の作品は「音」が一つのモチーフになっている。

